



中邑あつし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零

【Nコード】

N8602Z

【作者名】

中邑あつし

【あらすじ】

今時、珍しい硬派で正義感の強い不良、柚木太成。

一方、学校では毎日、イジメに遭い、両親には毎日、借金苦に虐待を受け、友達が一人もない相原誠。

柚木太成。相原誠。この二人が出会うとき、物語は大きく動き出す。

そして、舞台は4年後、日本は連続暴力団襲撃事件が世間を賑わせていた。その組織の名はZERO。暴力団は、ZEROに対抗すべく、銃器を密輸入。そして、ZEROを追う二人の刑事、碇と相

良。

「これらが作り出す物語は、ヒューマンサスペンスホラーです。他サイトにも掲載しております。」

1・柚木

人は、どれほどの物を失くすことが出来るのだろうか

どれだけ失くせば0になれるのだろうか

いつから、ボクの手はボロボロと物が零れ落ち始めたのだろうか……

二二三年 七月

「一体どうなってんだ！」

「皆、一斉に動き出しました！ 東京は愚か、北海道、関西、中部、九州！」

「クソッ！ 逃げ！ 手が空いてるものは全員、近くの現場へ迎え！」

「無理です！ 数が多すぎます！」

「構わん！ 行ける奴だけでもいい！」

「駄目です！ 既に現場へ向かってるもので手一杯です！」

「なんとかするんだ！」

「なんとかかって！ どうするんですか！ こ、こんなこと、どうして……」

「何でもいい！ 考えてもどうにもならん！ 取り敢えず、近くの現場へ向かうんだ！」

「り、了解！」

「本当に始めやがった！ ちくしょう。どうなってんだっ！ くそ

つたれえ！」

「碇さん、現場に付きました！ 救援お願いします」

「気を付ける仲川！」

「うわあっ！」

「どうした？ 仲川！」

「どうなってんだ……どうして、持ってるんだ……」

「おい！ どういうことだ！ どうした？ 仲川！」

「何で……こ、こんな……う、うわああー……っ！」

「仲川！ 何があった？ おい！ 仲川！ 仲川ああっ！」

序章

一・柚木

二一九年 七月

暖かい日差しが瞼を重くする。眠くてたまらない。別に寝不足というわけでもなく、今日だって、昼過ぎにここへ来た。ただ、昼の校舎の屋上つてのは、人をどこまでも心地よく眠りに誘う。

「柚木くん。ねえ、柚木くんってば！」

またか……。

自分がこうして一番安らげる時間を、いつも誰かが邪魔をする。

そして、今日はこいつ。

「……………」
無駄だと分かりつつも、今までの心地いい空間からすぐに抜け出せず、柚木は瞼をきつく閉め、全身に日差しを浴びる。だが、無駄なものは無駄だ。ドスッ！

「……………」
声にならない声が出た。

腹部に強い衝撃が走る。昼に食った柏おにぎりが喉元まで上がってくる。

「ご、ごめん。大丈夫？」

自分が思っている以上に柚木が苦しむのを見て、女は慌てていた。その手には、先ほどの凶器と思われる手提げ鞆が両手にあった。

彼女は、両肩に届くほどの黒髪を、夏の風になびかせ、柚木を心配そうに覗き込んでいる。

「チサ、やりすぎだろ」

柚木は、腹を抑えながら声を振り絞った。

「だから、謝ってるじゃん。いつまで寝てるの？ 学校終わっちゃったよ」

全く謝っている態度とは思えないチサの仕草も、ついさっきまでの慌てようを思い出すと笑いが込み上げてきた。

その上、この体制からだど、否応なしに、短いスカートの中の白いショーツが目に入ってくる。痛み分けた。

「なによ、ニヤけて、キモいんだけど」

チサは意表をつく柚木の笑みにバツが悪そうな顔をする。

「いや、てか、まだ昼すぎじゃねえか。もうちっと寝かしとけよ」
「はあ」

額に手をあて、チサが溜め息をついた。

「今日は、学校昼まででしょう。てか、柚木くん、学校に何しに来てるの？ 一回も教室にも来ないで、屋上で寝てるだけ？」

「分かってんじゃない」

柚木の返事にチサはあからさまに呆れてみせた。

「あんたねえ、だかつ」

「落ち着くんだ。ここが、一番」

チサが全て言い切る前に、柚木の言葉が遮った。

「そう」

落ち着くんだ。ここが、一番。そう言った柚木の目が余りにも悲しい目をしていて、チサは言葉を詰まらせた。

チサは、柚木のこういつた部分を放っておけなくて、つい世話をやいてしまう。チサ自信、それを理解している。柚木は何か、他の高校生とはどこか違う場所にいるように感じられた。それは、柚木本人の意思に反して。

柚木に対して相槌しか打てない自分がもどかしい。でも、それは間違っている。自分の場所がどうか、自分で決め付けてしまうのは何か違うし、他人が決めることでもない。

「その、柚木くんは、屋上が一番落ち着く場所かもしれないけど、もっと、もっとたくさん、自分の場所があると思う。だから……」

言いかけて辞める。自分がどれだけ恥ずかしいことを言っているか、柚木のニヤけ顔で現実に引き戻されたからだ。

チサは、これまたあからさまに顔を赤くしてみせた。

「ああ、もう一つあったわ。俺の場所。こいつだ。ツ痛」

柚木は、言い終わると同時に口元の絆創膏を剥がしてみせた。ピリツとした痛みに、屋上の優しい風が柚木の口元を撫でる。

「なんで、そうなの男つて。喧嘩ばつか」

また、あからさまに頭を抱えるチサに柚木は笑みがこぼれる。

「お前には、分かんねえよ。けど、俺、バカだからよ、いろんなゴチャゴチャ面倒くせえの抱えて悩むより、なにも考えず突っ走って殴り合つてると、それが楽しくて仕方ねえ」

まったくくくでもないことを言っている。

殴り合うだの、それが楽しいなど、チサには全く理解できなかった。

それに、今時リーゼントという時代錯誤な柚木の髪型は、それ以上で理解出来ない。

ただ、そう言っている柚木の顔は、とても無邪気で純粹だった。

「鞆、サンキュ」

チサの手から柚木は鞆を受け取ると屋上の出口へと向かう。チサは小走りに後を追いつき柚木の顔を覗き込んだ。

「アイス。食べたくない？」

これまた、あからさまにニヤけた顔で、チサが突拍子もないことを言うのだ。

「は？」

「アイス。私、バニラがいい」

「俺が金ないの知ってたんだろ」

「いいよ。私が奢ったげる」

「何企んでやがる」

「人聞き悪いこと言わないで」

明らかに、チサが何か企んでいる事が見て取れたが、柚木は、ことさら奢りという言葉に弱かった。

澄んだ空から照り返す日差しと、夏の風が創り出した屋上の心地よさに別れを告げ、柚木は屋上を後にした。

コンビニの駐車場でチサは子供のようにアイスを舐めている。柚木はアイスという気分でもなつかたらしく、缶珈琲を片手に持ち煙草を吸っていた。

「ねえ。煙草っておいしい？」

チサは、柚木の口から出てくる煙を目で追っている。

「美味いって思うときもある。飯の後とか。でも、美味いとか以前に大概が吸わないとやってらんねえ」

「分かんない」

「分らん方がいい。吸わないに越したことはない」

「お金ないくせに煙草は買うんだ」

チサが棘のある言葉で柚木に言う。別に未成年だからとか、そういうのではなく、柚木の現状を考えた上でだろう。

「これは、笹崎から一カートン貰ったやつ。それに、煙草代を浮かしたところで、家の借金はどうにもなんねえよ」

「そうかもしれないけど。お父さん返せなかつたら結局、柚木くんが……」

「メンドクセエの。親父の借金に振り回されんのは。いざとなったら、夜逃げでもなんでもすりゃいいだろ」

柚木がそう言うと、チサがあからさまに俯いた。

左手に持っていたアイスは、既に失くなり棒切れになっている一方、手持ち無沙汰な右手は、膝上のスカートをきつく握り締めていた。

柚木はそれを見て、バツが悪そうにフォローする。

「ああ、まあ、なんとかなるだろ。夜逃げは最終手段だから。その……、てか、お前何かあったんじゃねえの？ 話」

柚木は、屋上での出来事を思い出していた。

昔は幼馴染ということもあり、よく一緒に遊ぶこともあり、家族ぐるみの付き合いも多かった。だが、ここ最近、学校では会話はするものの、一緒に帰るなど久しぶりだった。

「うん、あのね。別に企んでるとか、そういうのじゃなくて、私のお父さんがね、卒業したら家で鍛えてやるからって。それで、その……」

「それで、前原建設で働けと」

「うん。太ちゃん、あつ、柚木くんがよければ、進学も決まってるって言って言ってたし」

太ちゃん。その呼びかけに柚木は懐かしさが込み上げる。

柚木太成（ゆずきたいせい）で、太ちゃん。そして、前原建設の一人娘、前原千紗（まえはらちさ）。

……いつからだろう。チサがその名で俺を呼ばなくなったのは。

「いいぜ」

「へ？」

チサは、この柚木の答えがよっぽど予想外だったのか、間の抜けた声を上げた。

「なんつう顔してんだお前。だから、いいぜ。俺も卒業してから、どうすつか分かんなかったしよ。頭悪いし、それに、ガキんとき、お前の親父の働いてる姿見て、カツコイイとか思ってたしな」

みるみるチサの表情が和らいでいく。

チサは本当に判りやすい。自分で気付いているのかどうか、口に出す前に考えていることが分かってしまう。

「本当に？ お父さん、きつと喜ぶ」

チサのその大げさな喜びに対し、柚木は、そのむず痒さに悪態をつく。

「鼻水出てんぞ、お前」

「え？ うそ？」

「うそ」

ドス！ チサの両腕からスイングされた鞆は、柚木の腹に、今日、二度目の衝撃を与えたのだった。

2・喧嘩

二・喧嘩

ドカッ！

背中に強烈な痛みが走る。壁に叩きつけられた背中が悲鳴を上げている。相手の飛び蹴りでの衝撃より、そっちの方が致命傷だ。

「これで終わりじゃねえだろ？ 柚木」

背中 of 痛み に耐えながら、相手を睨み返す。

柿原宗一（かきはらそういち）。清領高をシメている。百八十七センチ近くある身長と、やけに老けたその顔付きは、まるで同じ高校生とは思えなかった。

柚木と柿原の喧嘩はこれで五度目。四勝一分。

喧嘩にも、いろいろな理由がある。派閥争い、誰が一番強いか、仲間がやられた、等。柚木には、この喧嘩がどんな理由かなど分からない。

いや、理由など興味がなかった。ただ、喧嘩する度に強くなっている柿原と喧嘩するのが楽しくて仕方ないのだ。

「バカヤロウ。喧嘩の最中に喋ってんじゃねえよ」

川原に柚木と柿原が腰掛け、柿原が煙草に火を付けた。

互いの制服は所々が破れ、互いの顔は見れたものじゃない。柚木の自慢のリーゼントはやる気なく頂垂れ、柿原の左目は視界を遮るほど腫れ上がっていた。

川の流れは穏やかで、茜の夕日が、川に斑なオレンジ色の光を彩っている。時折、風が傷口を撫で、心地よい痛みが柚木等を包み込む。

「おい、煙草一本くれよ。柿原」

「は？ テメエの吸えよ」

「持ってねえんだ。俺が勝ったんだ。敗者は、煙草一本くらい献上しろ」

柚木の言動に、明らかに柿原が怒りを覚えている。

「テメエ、頭イカレちまつたんじゃねえのか？ 勝ったのは俺だ。先に氣い失つたのはテメエだろうが」

「先に立ち上がったのは俺だ。それに、お前がもう動けないと分かったから、俺は寝ただけだ」

「んだとお！ もう一回やっか？」

「メンドクセエ」

「またそれかよ。ちっ、ほらよ」

馬鹿らしくなったのか、柿原は柚木に煙草を差し出した。

「サンキュ」

柚木は、煙草を啜え、顎を柿原に突き出した。

「ん？」

「火」

柿原の顔に怒りが露になる。

「テメエ。ナメてんのか」

「火、持ってねえんだ」

「ちっ、分あつたよ。テメエで付ける。」

柿原はバツが悪そうにライターを差し出した。柿原はなんだかんだと言つても面倒見がよく、後輩達からも慕われている。柚木は、そういつた柿原を男として心から尊敬していた。

「よお、最近、清門高の噂知つてつか？」

柚木が煙草に火を付けたのを確認すると、突如、柿原が思い詰めた顔で問掛けてきた。

「噂？ よく分かんねえけど、清門高の奴ら、最近、幅利かせてんのか、ウチのもんが何人かやられてる」

「お前んともか。清門高に寺田つてのが転校してきたらしいんだが、そいつがヤベエらしいんだわ」

「ヤベエって、強えのか？ 珍しくヘタレてんじゃねえか」

柿原がらしくないことを言うので、柚木は悪態を付けてみせる。だが、柿原は、意外に悪態に噛み付きもせず語り始める。

「いや、なんか、違うんだ。その、なんつっていいか、俺らガキは、頭悪いし、喧嘩しか能がねえかもしれねえ。でも、それでも、シガラミだらけの大人になる前に、ガキのうちしか出来ないこととか、拳ひとつでどこまでいけるかとか。下らねえかもしれんけど、そういったもんだろ？」

そりゃあ、頭に血い昇って刃物だしたり、下手したらイカれたヤロウが人を殺したりすることもある」

柿原が、頭悪いなりに何かを伝えようとしているのは分かるが、柚木自信、頭が悪いため、柿原が何を言いたいのかうまく伝わらなかつた。

「で、結局、何が言いたいんだ。その寺田つてのが誰か殺つたのか？」

柚木は答えを急いだ。柚木にしてみれば、柿原が結論を先延ばしにする理由が解らなかつた。

「いや、寺田自信は何もしていない。いや、何もしていないこともないか」

柿原の言動に柚木は、ますます訳が分からなくなる。

「どつちなんだよ」

「わりい、何つっていいか、そいつは、直接喧嘩もしなけりゃ、表にも出てこないらしんだ」

「なんだそれ。そんなん、ただのイモじゃねえか。そもそも、寺田なんてホントに居んのかよ？」

「ああ、全くだ。俺も、寺田つて奴が本当に居て、表立ってくれりゃ、どんなヤバイ野郎でも、ぶち噛ましてやるんだが。まるで、実態が掴めやしねえ。それに……」

聞けば聞くほど、柿原の言っている事が理解できない。柚木の頭は、複雑な事に追いつける程の思考を持ち合わせてはいなかつた。

というか、柚木にとって寺田の存在が居る居ないは、どうでもよかった。なんだかんだと、清門高をシメてしまえば、それで済むと考えていた。

「それに？」

柿原が、何か言いかけていたのを思い出し、柚木は続きを促した。「どうも妙なんだ。ウチの奴等は清門高にやられたつつつた。でも、奴等が着ていた制服は大滝高だったって言うんだ」

急に辺りの空気が張り詰めた。いや、辺りの空気が張り詰めたのではなく、柚木自身が動揺し、そう感じたただけだ。

「どういうことだ。ウチの高校じゃねえか」

「ああ」

訳が分からない。大滝高の制服を着ているのなら、何故、清門高にやられたなんて。

そもそも、自分の高校の者が清領高に手を出すはずがない。いや、それは間違いか。大滝高と清領高はもとも仲が悪い。だが、だからこそ、大滝が清領に手を出したら、それが自分の耳に入らないわけがないのだ。

柚木は訳が分からないながらも、柿原の言ったヤバイ、その空気を感知始めていた。

「お前の疑問は分かる。制服がテメエんとこだから、テメエが絡んでると思っていたがどうも違うらしい。それに、テメエんとこの制服来た本人が自分は清門のもんだと言ったらしい」

胸糞悪い。ムカついたから殴る。テツペン取るために喧嘩する。

それは、そういった単純なものじゃない。

……なんか、ドロドロしてやがる。

「マジ、訳分かんねえ」

柿原はかまわず続ける。

「俺は、始めはテメエんとこが清門に下っちまっただって思った」

「んあ？ んな訳ねえだろ」

柿原が、予想外なことを言うので、柚木は苛立ちを隠せない。だ

が、冷静に考えれば柿原がそう考えるのが自然なのだ。

「まあ、一本吸えや」

柚木に対し柿原は冷静だ。場を見据えている。頭に血が上っていた柚木も冷静さを取り戻し、煙草に火を付けた。

そして、それを見届けてから、柿原はゆっくり続きを語りだす。

「ところがだ。次は、ウチの制服着てるもんが清門の名を語ってるのを見た奴がいてな。そいつにやあ、俺も驚かされたってわけよ」

「で、どうなつてんだよ？ ああ？」

イライラする。ついさつき、冷静になつたはずなのに。

柚木はどうしようもないイライラを柿原にぶつけた。自分に対し冷静な柿原が、余計に自分をガキの様に感じさせてしまうのだ。

「そう、突っかかるな」

以前、柿原は冷静だ。ますます自分が小さく見え、柚木はただ、ぶつけようのない怒りを、川面へと石を投げつけた。

「で、俺なりにいろいろ調べたんだ。そこで、少しずつだが見えてきやがった」

柚木は、口を挟むと結論が遠ざかることを覚えたのか、黙って聞いている。

「金だよ」

「金？」

金。嫌な響きだった。柚木の周りには何かとそれが付き纏う。柚木は金の持つ怖さ、汚さを、身をもって知らされていた。柚木にとつての喧嘩はそれを忘れるための手段に過ぎないのかもしれない。

「そう、金。寺田は、金で人を動かしている。清門だけに限らず、他校も巻き込んで」

虫酸が走る。内臓が擦れる感覚に襲われる。

金で苦しんだ分、金の怖さを知っているからこそ、柚木は金持つの絶大な力も知っている。金で人の心を動かすことが出来るのか？

答えはYESだ。全ての心、全ての人が金で動かされるといいうわけではないだろう。だが、現実、大概のことは金で人は動くのだ。

この街では、負け知らずの怖いもの知らず、最強を誇る柚木太成でも金の力には憤りを感じるほかなかった。

「で、その寺田の野郎は金使って人集めて、何がしたいんだ？」

「分からん」

「なっ？」

ここまで、話しておいて分からないのでは、結局、結論なんて出ない。

「俺は神さんでもねえし、寺田の評論家でもねえ。ない頭絞って、ここまででは調べたんだ。バカにこれ以上期待するな」

柿原の言うことは最もだ。柿原が寺田のことを調べていた時、柚木は周りに目もくれず、ただ、喧嘩し、はたまた校舎の屋上で昼寝をしていた。そんな柚木が、柿原に全てを求め、苛立ちをぶつけるのはお門違いなのだ。

「まあ、寺田って野郎が何か企んでんのは間違いない。テメエもそれ肝に命じて用心するこつた」

柿原は、たまに親父くさいことを言う。だが、柚木は、柿原のこつたところを憎めないとも思うのだ。

「じゃ、俺、帰るわ」

そう言つと、柿原は、手を後ろ手にひらひらさせ、単車に跨ると、低い排気音を川原に響かせ帰路に向かった。柚木は、ただそれを眺め、柿原の姿は次第に無くなり、単車の低い排気音だけが遠くで聞こえている。

「ちっ、俺の場所がまた無くなつちまつたじゃねえか」

柚木にとって仲間、喧嘩といった自分の空間が、また、金によって奪われた気がして、ただ、その場で立ち尽くすしかなかった。

『その、柚木くんは、屋上が一番落ち着く場所かもしれないけど、もつと、もつと、たくさん自分の場所があると思う。たくさん。だから』

「……なんで今、
テメエが頭ん中にいんだよ。
」
「笑けてくらあ」

3・金

三・金

夕暮れ時、五月蠅いほどの蝉の声は、まだ帰路へ響きわたっている。時間の経過と共に夜が訪れ、次第に蝉の声は、涼しい夏虫の声へと変わるだろう。

昨日、雨が降ったためか、湿度を残した空気は、身体にジメジメと纏わり付いてくる。制服のカッターシャツが地肌に張り付き、気持ち悪さを際立たせる。

歩き慣れた帰路。もう、高校の登下校を繰り返すこと二年半、馬鹿でも歩き慣れる。家に近づくほど、それは増すばかり。増すばかりのはずだ。しかし、ということが、家に近づくほどに吐き気が込み上げてくる。

いい加減、慣れて欲しいものだ。家が安らげる場所というのは、一体どんな気分なのだろう。少なくとも自分の場所は家にはない。シガラミにまわりつく大人にはなりたくない。出来るなら、一生ガキのままでもいいくらいだ。だが、家に近づく度に、大人になったら、こんな家からさっさと逃げ去りたい。いや、この街から。なんてことを考えてしまう。

『あたしのお父さんがね、卒業したら家で鍛えてやるからって』
『本当に？ お父さん、きつと喜ぶ』

……またこいつか。俺の頭ん中に湧いてきやがる。分かってている。自分がこの街から出て行けないことも、夢を追うには、自分の環境がそれを許してくれないということも。

小さな街に嫌気が差し、ここではないどこかでと夢は視るものの、

柚木自信、この小さな街の社会に食い潰される、ちっぽけな一人の人間に過ぎないのだ。

金かえせ！

借りたものは返しましょう。

柚木さんは人のお金を返せない非国民です。

ここの住人は人のお金で生きています。

死んでも構わないので、お金を返してください！

くたびれた一階建てのアパートの片隅に、落書きやら張り紙でありったけの罵声がアパート一帯を埋め尽くしていた。窓なんて、張り紙だらけでその役割を果たせていない。

そして、ドアの前には、スーツ姿のいかにもそうな男が二人。二人の足元には、数本の煙草の吸殻が散乱している。その時間の経過が、金に対するこの者等の執拗なほどの執着ぶりを、柚木に否応なくも痛感させるのだ。

髪をオールバックにした、紫のスーツを着た男が口に煙草を咥えると、すかさず、グレーのスーツ姿で細身の男が、それに両手で火を付けた。二人の上下関係がハッキリと伺える。

「またか」

当然、予想していたことに柚木は頭を抱えた。

「おかえりい。太成ちゃん」

今時、昭和を感じさせる紫のスーツを着た男が、猫なで声で柚木に詰め寄ってきた。

「太成ちゃん、君の親はいつだったら家に居るのかな？」

「知らねえ」

「んだと？ コラ！ テメエ、口の聞き方……」

「まあまあ」

柚木の態度が気に食わないのか、細身の男が食ってかかってきたが、猫なで声の男がそれを割って宥めた。

「しかし、佐伯兄」

細身の男は、バツが悪そうに佐伯とかいう男に場を委ねた。

「太成ちゃん。どうせ、お父さんは居留守使ってんでしょ？ お父さんが駄目なら太成ちゃんでもいいからさあ。三百万、返してくんない？」

猫なで声が妙に鼻に付く。ジリジリと、胸の奥の方から厭らしいプレッシャーが押し掛ける。

「俺が払える訳ねえだろ」

と、瞬間、佐伯は柚木の胸ぐらを両手で掴み上げ、顔を歪ませ、佐伯の声がドス黒いものに変わる。

「払えねえじゃねえ！ 払うんだよ！」

このギャップの使い分けが、人を恐怖に駆り立てるのに効率がいいのを佐伯は経験から身に付いていた。

柚木は構わず佐伯を睨み返す。

「威勢がいいねえ。ウチの組に欲しいくらいだ。テメエ、この辺じや、幅あ効かせてんだろ？ カツアゲやら上納金やらで金集めりや済む事だ。なんなら、ステッカーぐらいは作ってやる。それ、一口十万で売って来いや」

「分かった。分かったから、もう帰ってくれ。ステッカーは要らない。金はカツアゲでもして集める」

何も分かってはいない。金を返す気などさらさらなかった。

……もう、メンドクサイ。

取り敢えず、この状況の打開に、柚木は従ったふりするしかない」と結論付けたのだ。

「おう。太成ちゃんが物分かりのいい子で助かるよ。また来るからな」

そう言うと、佐伯は、細身の男を連れ去っていった。

「クソッ！」

ぶつけようのない悪態を付き、柚木は玄関のドアを開けた。

真っ暗だ。部屋の電気を付けても誰も居ない。父は本当に居なかった。

……クソ親父。どこに行つてやがる。仕事か？

最近、父は夜も仕事をしているらしく、ほとんど家に居る事がなかったが、柚木にとってそれは気が楽でもあった。

大体が、柚木が家族との馴れ合いなど出来る柄ではなかった。それ以前に、この状況じゃ馴れ合いどころではないのだ。

母が生きていた頃は、羽振りもよく、父の人一倍筋肉質でガツチリとした体型は、誇らしくもあり、憧れさえ抱いていた。

昔から父は無口で余り喋らなかつたが、今は、それが何を考えているのが解らず、無性に腹が立つ。

テーブルには、カップ麺がひとつと、置き手紙。

いつも、こんな飯ですまない

「クソッ！」

柚木はただ、憤りを口の中に麺と同時に放り込んだ。

4・笹崎

四・笹崎

蒸し暑い。ジワジワ全身に汗が滲み出しているのが分かる。それでも、ここで、暑い日差しを浴びて過ごすことはそう悪くない。時折、通り抜ける風が体の汗を冷やし心地いいくらいだ。ただ、突き刺す程の日差しが瞼の裏側まで焼き付いてくる。次からは、日除け変わりになる物を持ってこようかなどと柚木は思った。

「柚木。おい、柚木」

……そろそろかと思った。

柚木には、この場所で寛げる時間は無いらしい。

夏のジリジリとした暑さもあつてか、または、腹部への強烈な衝撃に懲りたのか、柚木はすんなりと腰を上げてみせた。

「んだよ」

腰を上げると同時に相手の顔を見上げる。そこには少し切迫した面持ちの笹崎光一（ささざきこういち）の顔があつた。

「やられた。次は充が。また、清門の奴らだ」

正直驚いた。清門がまた何か仕掛けてくることは予想出来ていた。既に、柚木の学校の生徒も数人やられている。他校も巻き込み、その数は数えきれない程だ。

しかし、笹崎の言う充は藤井充（ふじいみつる）。喧嘩の強さは柚木に引けを取らせないくらいなのだ。

「マジか。そんな時の状況分かるか？」

笹崎は、少し落ち着きを取り戻し、頭を整理しているようだった。「ああ、あいつ、今、藤崎病院に入院してる。そこで、やられた時の事を一緒にいた甲斐に教えてもらった。

相手は数人だったらしい。商店街を甲斐と二人で歩いてる時に後

るから。鉄パイプで頭割られてた。徹底的だったってよ。その後も」
余程悔しいのか、笹崎の右手は、爪が突き刺さる程強く握り締められ、顔は、歯を食いしばり、クシャクシャに歪ませている。

「甲斐は？ 何してたんだ」

「数人のうちの一人を相手にしてたらしい。どうやら、連中、甲斐には目もくれず、充に集中攻撃してたらしく、甲斐も止めに入ったんだろうが、あいつ、喧嘩弱えし」

「元々、充は狙われてたって訳か」

「いや、それは多分違う。奴らは元々、手当り次第だ。たまたま、その場に居合わせたのが充で、奴らの中に充を知ってる奴がいた。まあ、ここいらのガキだったら、充のことは皆知ってたんだろ。……あいつの強さも」

嫌な予感が柚木を支配していく。突き刺す程の日差しを浴びているというのに、背中には、異様な寒気が走り、冷や汗が滲み出しているのが分かる。

「だから、充が集中攻撃された」

「ああ」

笹崎は、力なく相槌を打つ。

何か腑に落ちない。何かは判らない。だが、どうも笹崎の話に違和感が拭えないのだ。

…… 奴等は一体何がしたいんだ。

「柚木、奴らのことを清門で括るのはやっぱり違う気がする。制服、バラバラだったってよ」

虫酸が走る。奴等のことがますます解らない。

制服がバラバラということは、新しいチームか何かなのだろうか。この街にも、チームやら族はいくつもある。だが、何故、次々と襲い来る奴等は、清門を語る必要があるのだろうか。

…… 全く分からねえ。

柚木は何かあれば、大概は拳で片していた。難しい事は頭のキレる充が熟していたからだ。

柚木と充、そしてチサ。この三人は物心付く前からの幼馴染だ。充は、勉学に勤しむということは無かったが、頭が良く、冷静に物事を捉え、皆から慕われていた。

「考えても仕方ねえ。どうも、俺は頭使うのは苦手だ。やっぱ、俺は体使うのが一番だ。取り敢えず、充の見舞いでも行こうや」

二つ返事で合意を求めた柚木に対して、笹崎は俯いたまま、その場を動かこうとしない。

「どうした？」

「面会謝絶だ。充は今、緊急手術中だ。頭割られてんだぜ。最初の後頭部への一撃で充はもうオシヤカだった」

内蔵が鷲掴みにされる錯覚が襲った。血の気が引いていくのが判る。先から嫌な予感はしていた。ただ、笹崎から直接聞かされるまで、頭がそれを受け入れようとしなかった。

自分の置かれている状況は、もう不良のレベルを超えている。喧嘩の最中に角材、バット、鉄パイプが使われるのは珍しいことではない。だが、いくら不良でもなるべく頭は避ける。

いや、何より最初に後頭部を割られて、もう動けなくなった相手に、数人で袋叩きなど常軌を逸している。

この街全体を取り巻き一連の騒動により、人の生死が関わることになるとは、柚木は露とも思っていなかった。

一旦、嫌な予感を受け止めると、頭に次々と不穏なことが思い浮かばれる。

「クソツ！ とりあえず病院だ。大丈夫なんか？ 充は？」

柚木は居ても立っても居られず、病院に向かおうとする。

今は喧嘩とか清門がどうかより、柚木は、今の充の容態が気掛かりでならなかった。

「判らない。家族でもない俺が医者に聞く余地なんてないんだよ。かといって、充の両親は、俺らの事を目の敵にしてやがる。今は、病院には行かない方がいい」

一刻も早く、充の容態を知りたい柚木に対し、笹崎は、柚木が病

院に行くのを引き止めた。充の両親は、柚木等を拒絶していると言
うのだ。

……クソツ。せめて、命に別状あるかどうかさえも聞けないのか。
柚木は人の親というのが苦手だった。世間体やら、何やら、子供
を自分のステータスと思っている親が多過ぎる。近所の子と自分の
子を比較し、手に負えなくなれば、全てを学校や友達、他人のせい
にして子を押し付ける。

といつても、自分の一人息子が大変な目に遭っているのだ。この
場合、どんな親だろうが、いつも、一緒にいる不良の悪友等を良く
思わないのは当然なのだろう。だが、奴等は不良や真面目な奴、そ
ういった者を見境なしに襲っているのだ。

……もし、充が俺等とツルンでなかったとしても……、クツ、俺
も大人達と何も変わりやしねえ。どこか自分のせいじゃないと責任
逃れただけだ。結局、自分も汚い大人と一緒になのか……。

「チツ、誰も充の容態は把握出来ねえのか」
「いや、今はチサが病院に居る。容態は後でチサに聞けばいいだろ
う」

「そうか。充のことはあいつに頼るほかないな。甲斐は？ あいつ
は今どこにいるんだ？」

「警察だ。事情聴取つてやつ」

警察が動き出している。事態はますます、都合が悪い方向に事が
運んでいた。

「笹崎、サツがケリ付ける前に、俺等で充のカタ取るぞ」

「取るつて、どうやって？」

「殴り込みに決まってるんだろ。清門だ！」

5・寺田

五・寺田

柚木も、充がやられるまで何もして来なかった訳ではなかった。柿原から、寺田について聞かされていた事もあり、清門高の制服見つけては、寺田の事を聞いてまわったが、誰も口を割なかった。それどころか、自分の高校で起きている事を、まるで把握出来ていない者等までいるのだ。我、此処に在らず。という感じだ。

……どうなつてやがる。そもそも、制服がバラバラなら、清門を問い詰める事自体がズレているのか。

柚木が何とか一連の騒動について聞き出せたにせよ、確信には何一つ繋がらなかった。それもあつてか、彼はこの件に対して根本的なズレを感じ取っていた。ただ、必ずといって、背景には寺田の名前が出てくるのだ。

充は、手術は終わったものの、相変わらずの面会謝絶。甲斐は事情聴取の後から、学校にも来ず、家に引き籠っているらしかった。無理もない。彼は元々臆病だ。目の前で友人が殺されかけているのを見て畏怖してしまつても仕方がなかった。

……奴は何者なんだ。一体、何をしようとしてる。

柚木は寺田に対し、僅かながら恐怖を感じ始めていた。それ以上に、これ程の憎悪を覚える事が今まであつただろうか。まして、その相手の実態がまるで掴めないのだ。

昼休みの校舎の屋上で、柚木は柵を背もたれに腰掛け、右片膝を曲げ、その膝に右肘を置き、その手で両コマカミを押さえ付け訝しい表情を造っている。一方、その横で笹崎は柵に腕を掛け、煙草を噴かしていた。

屋上のドアが開けられると、背が小さく坊主頭の男が、柚木等の方へ歩み寄って来た。その頭には、右側面に二本のライン、左には一本のラインが入っており、左眉にもまた、二本のラインが入っている。

「柚木さん」

「シゲか」

シゲ、前田重晴（まえだしげはる）は、一つ年下の後輩で、人付き合いが良く人脈もあるため、こと、情報収集においては得意分野でもある。柚木に煙草を一本差し出すと、柚木の隣に腰掛け、続け様に喋り出す。

「寺田の事なんすけど、金で人動かしてるって噂は知ってますよね？」

シゲはまず、そのことを知っていなければ話は進まないとばかりに柚木に伺った。

「ああ、知ってる」

「その金なんすけど、この金の受け渡しも奴等は、直接寺田の手からは貰ってないみたいなんです」

どおりで中々姿が出て来ない訳だ。騒動を起こしている当人達自体、寺田の姿を見ている者はほとんどいなかった。

柚木が事の次第を把握しているのを確認すると、シゲは続けて話し出す。

「まあ、要するに、寺田と奴等を金で繋ぎ合わせる仲介人が居るって事です。まずは、そいつを突き止める事が先決かと」

それは間違いがない。この仲介人なら、寺田のことを間違いなく知っているはずだ。だが、またこの仲介人に辿り着くまでが、まどろっこしくて仕方がなかった。

「柚木さん、前に清門を問い詰めること自体がズレているのかわかってましたよね。たぶん、それは間違いじゃないと思います」

「じゃあ、清門に殴り込みを掛けても無駄だって事か？」

「はい。というか、既に清門高を直接潰しに掛かった奴等がいるん

です。この一連はそもそも、うちと清門だけの抗争じゃありません。うちの大滝高や清領高、那賀峰高、田口西、田口北、族の竜騎閃りゅうきせん海窮連合かいきゅうれんごう。これだけじゃ収まりません。奴等は俺等みたいなガキに限らず、無差別に事を起こしています」

寺田は、これだけの奴等を敵に回して、何を企んでいるのだろうか。事の大きさに対し、その目的が全く解らないのだ。

「俺の知り合いが田口西高に居て、そいつ、竜騎閃にも入ってんですが、その、好もあって、田口西、竜騎閃が協戦して、清門に殴り込みに行ったらしいんです」

「それは、俺も初耳だ。で、どうなったんだ？」

それには、余程意外だったのが、聞き手に徹していた笹崎が身を乗り出す。

「どうもこうも、清門は誰も戦おうとしないんですよ。寺田の影すら見えず、清門の奴等を殴ろうが蹴ろうが、すみませんの一点張りです。」

元々、清門は弱小高ですから。それで、田口西、竜騎閃も何も得ず、引くしかなかったんです。皆、煮え切らないといった感じで」

シゲはお手上げといったふうに手を上げてみせる。

柚木が清門校の生徒に聞いた時と同じだった。結局、清門に直接殴り込みに行こうが、何も解らないのだ。

……八方塞がりか。こうしてる間にも警察は動いてやがる。どうしたらいいんだ。

事は次第に大きくなり、その被害の数も増えているのに対し、柚木は、寺田に対する手掛かりも、それを見付ける手段も思い浮かばない。歯痒い。苛立ちが抑えきれない。怒りが込み上げるも、ぶつける相手がいない。姿を見せない寺田が憎たらしい。その仲介人ともやらも、金で動かされている者等も。

「とにかく、これからも情報は当たれるだけ、当たってみます。」

くれぐれも、柚木さん、笹崎さんは一人で出歩くのは避けて下さい」

柚木の苛立ちを察したシゲは、情報を調べ上げ、彼に出来るだけ早く伝えてやるのが先決と判断した。

「分かった」

シゲが凄く頼り甲斐ある奴に見えた。柚木はシゲのそういった部分に嬉しさを感じつつ、後輩に頼って何も出来ない自分が腹立たしくなるのだった。

6・充

六・充

柚木は、いつもの校舎の屋上にいた。いつもの様に昼寝を決め込もうするが、頭の中にドロドロと流れ込む思考のせいか、なかなか寝付けやしない。時間の経過さえもよく把握出来ないほどだ。

陽はいつの間にか落ち、校舎から見える空はオレンジ色になり、街並みは群青の影を造っている。昼と呼ぶには程遠かった。

ピピピピ。耳障りな携帯の音が耳を打つ。

「もしもし」

「……………」

「おい、もしもし」

「充が……、死んだ……………」

ゴツ！ 左頬に鈍い痛みが走る。

「何しに来た。お前等が充を殺したんだよ。たった一人の息子なんだ！ 息子を返せ！」

顔をシワクチャにしながら、充の父親は柚木に殴り掛かった。

殴られる事に関しては慣れている。慣れてはいるが、十数年生きてきて、人に殴られる事がこんなにも痛いと感じたのは初めてだ。内側から言いようのない痛みが込み上げてくる。

「お父さん、辞めて。葬式中に」

充の母親が父親を止めに入った。決して、柚木を庇うために父を止めた訳ではなかった。

「すみませんけど、出て行って下さい。判るでしょ？ ここは貴方達のいい場所じゃないの」

母親の顔は酷く糞れ、化粧がその役割を果たせていない。どれだ

け泣き腫らしたのだろう。化粧で隠しきれない程に、目の周りは腫れ上がっていた。

「なあ、返してくれ。充を返してくれよう……」

物凄い形相で柚木の胸ぐらを掴んでいた父親の顔に力はなくなり、柚木に縋り付く様に父親は膝を地に落とした。

「すいません……」

何に對してのすいませんなのか判らない。ただ、責任は感じていた。もし、充が生き返る事が出来るなら、変わりに自分の命だってくれてやる。死ぬ事なんて全く怖くない。自分の死の代価が充の命になるなら、喜びさえ覚える。

だが、結局、何も出来やしない。自分の無力さの憤りをただ、すいません……としか言葉に表せなかった。

「せめて、線香だけでも上げさせて貰えないでしょうか？」

隣にいた笹崎が視線を落とし込み父親に尋ねた。

「母さんの声が聞こえなかったのか？ 出てってくれ」

「でも……」

「出て行けっ！」

間髪入れない父親の言動に、柚木達は従うしかなかった。

葬式に参列させてもらえなかった柚木等は、肩を落とし、昼下がりの帰路を辿る。

言いようのない悲しみと悔しさで身体中が強ばる。次第にそれが言い表せようのない憎悪に変わっていく。握り締めた拳の中は汗が滲み出し、自分が今、どんな顔をしているのか判らない。

余程な顔をしていたのか、笹崎が柚木の顔を見て驚いていた。

「寺田だ。許せねえ。笹崎、何としてもあいつを見つけて出すぞ」

「……もう、辞めよう。俺はもう降りるよ」

一瞬、笹崎が何を言っているのか解らなかった。

「何言っただ」

「もう、辞めようって言ってるんだ」

「だから、何言ってるんだ。充が殺されたんだぞ」

怒りが自分の声さえも震わせている。顔の筋肉がコントロール出来ない。頬はヒクヒクと吊り上がり、顎はガクガクと上下する。

「だからだよ！ もう、俺等の手に追えるもんじゃない。甲斐だつてオカシクなつちまうし、大体、寺田つてどこに居んだよ！ もう、怖いんだ。嫌なんだよ！ もう！ ……警察に任せよう。それでいいだろ？」

笹崎は、体を震わせ怯えていた。柚木は愕然とした。笹崎のこんな姿を見るのは初めてだった。それでも、やはり納得がいかない。

……ダチが、仲間が殺されてノコノコと引き下がるような奴だったのか。もし、殺られたのが笹崎だったとして、充なら絶対俺と同じ事を考えるはずだ。寺田を放っておいちゃいけない。

「分かった。テメエは家で大人しくしとけ。他の奴等とで寺田は何とかする」

「無駄だ。他の奴等も一緒だ。雄二や楠木等も。もう、この件には手を引きたがつてる」

「どういうことだ。お前等、悔しくねえのかよ！ このまま、引き下がるわけねえだろ！」

「どうもこうも、皆、お前みたいに強くねえんだよ。そりゃあ、お前や充の強さに憧れて慕ってる奴もたくさんいる。その充も殺られちまった。腕っ節だけじゃない。周りの嫌な出来事、物事を抱え込めるほど、俺等は強くないんだよ」

「そうか……」
それしか言えなかった。自分と仲間との間の意思の違いに対し、ショックを隠せない。

柚木にとって、仲間はこうであるべき、自分と同じだと思い込んでいたに過ぎなかった。本当に仲間のことを思うのなら、笹崎の言う通り、この件は、仲間を巻き込まず、そつとしておくべきなのかもしれない。

「じゃ、俺こつちだから帰るわ」

言つと、笹崎は路地の角を曲がり歩き出した。

「笹崎」

「ん？」

「すまん」

「らしくねえ」

片手をひらひらさせ、笹崎は帰路に付いた。

家に帰る気も起こらず、どれくらいの時が経過したのだろうか、暗くなり始めた公園のベンチで一服する。始めこそ、子供等が駆け回り、無邪気に遊ぶ姿が見受けられたものの、今はベンチに柚木一人が取り残されていた。

公園に来るのはいつぶりだろう。この歳になると全く縁がない。小学生の頃を思い出す。あの頃は、自分と充とチサ、いつも三人一緒だった。

「ここにいたんだ」

葬式が終わったのか、そこにはチサの姿があった。彼女は柚木の隣に腰を掛け、自分の膝を見つめ、何か思い詰めたような顔をしている。チサもさつきまで泣いていたのだろう、目が赤く腫れ上がっていた。

「変なこと、考えてないよね？」

「変なことって？」

「寺田って人のこと。もう、太ちや、柚木くんまでいなくなっちやうのは嫌だからね」

チサまでが柚木を止めようとする。

チサのその両手は、カ一杯スカートを握り締めていた。柚木を思つてのことなのだろうが、柚木は寺田の事から手を引くつもりはなかった。

「太ちやんでいい」

「太ちやんは、いなくならないよね？」

「いなくなるわけねえ」

「だったら、もう、寺田って人の事、探るのは辞めて」

「俺があいつのこと探るのを辞めたところで、奴は無差別に人を襲ってる。危険なのは変わりない」

その通りだ。このまま放っておけば、チサにまで危険が降り掛かる可能性だってある。

「それでも、それでも辞めて。後は警察が何とかしてくれるはずだから。充くんも、きつと生きてたらそう言うと思う」

……充が、そんなこと言うはずがない。

柚木は誰よりも充の事を知っているつもりだ。だが、同時にチサは、柚木、充、二人の事を誰よりも理解していた。柚木は、彼女が何故そう思うのか、どうしても納得出来なかった。

「警察なんかには任しておけるか。大体、充が生きてたら俺を止める訳ないだろう」

「うっん。充君ならきつと止める」

きつぱりとチサは言ったのけた。その視線は公園の中央にあるが、どこか遠くを見ている様に見えた。

「太ちゃん、覚えてる？ あの時のままだね、滑り台。」

小学生の時さ、太ちゃんが滑り台の下に大きな蜂の巣を見付けて、公園の平和は俺が守る！ なんて言って、棒切れ持ってた。私は怖くて、泣いて太ちゃん止めたんだけど、太ちゃんは俺に任せろ。なんて言ってる」

なんとなく覚えている。いや、チサの話を聞いて思い出してきた。「それでさ、太ちゃんその棒で蜂の巣叩き落とすんだけど、その後が大変。落ちた巣からいっぱい蜂が出てきて、私は、遠くで泣くことしか出来なかったけど、太ちゃんは、蜂に刺されながらも棒で蜂と戦ってたの。結局、太ちゃんも適わなくて、体中蜂に刺されて大泣きしちゃって」

その時の懐かしい風景がチサには観えているのか、チサの遠くを見つめるその目は、まるで小学生そのものだ。

柚木はというと、恥ずかしさで柄にもなく、顔を赤らめていた。

というか、チサは淡々と語ってはいるが、柚木にとっては生死の堺をさ迷いかけた出来事だった。

「充くん、あの頃から人一倍、冷静に周りが視えてたもんね。私が泣いて太ちゃん止めてるとき、充くんは、私のお父さんの現場まで大人達呼びに行つてて、お父さん達が駆け付けけるのが遅かったら、太ちゃん、シヨツク死しててもおかしくなかつたつて」

あの時、気付いた時には、柚木は病院のベッドの上だった。

……そうか。だから、なんとなくしか覚えてないのか。

「太ちゃんはね、今、色んなことがあつて、周りが上手く視れてないと思うの。だから、充くんが生きてたら……」

その通りなのかもしれない。柚木は、自分の知らないうちにも、充に助けられてきている。自分が何も考えず喧嘩していても、充はそのフオローも徹底していた。

昔、暴走族の竜騎閃の頭とのタイマンをすると、川原に柚木が一人で向かったことがあつた。だがそれは、竜騎閃の罠であり、川原には木刀や角材を持った十数人の族が待ち構えていたのだ。柚木は構わず十数人を相手取り、応戦していたが、いくら柚木でも多勢に無勢、現実、武器を持った複数の族を一人で倒すには無理があつた。一方、竜騎閃の罠を見越して、仲間を集め、柚木の窮地を救つたのは、他でもない充だったのだ。

……ただ、俺一人がガキのまんまつてわけだ。

「ああ。お前の言う通りかもな」

「じゃあ」

「ああ。もう、寺田の事は干渉しない」

「よかつた」

チサの顔がみるみる緩んでいく。本当に表情が分かりやすい。

「あ、太ちゃん達の分も、お焼香、私が変わりに済ませといたから。充くん、きつと喜んでると思う」

途端、今まで押し留めておいた何か弾けた。

親友の死。それが柚木に突き刺さる。受け入れなくなかつた。信

じたくなかった。考えないようにしていた。ふと、悲しみに襲われることはあった。だが、親友の死の現実を、寺田への憎悪に転化していた。彼の死に耐えきれぬ程、柚木自信、心の強さを持ち合わせていなかったのだ。ずっと、幼い頃から一緒だった。これからも、大人になっても、ずっと一緒にツルんでいくものだと思っていた。それが当たり前だと思っていた。三人が。それなのに……。

柚木はチサに抱き付き、溢れ出す涙を止められない。チサは、始めこそ驚いてみせたが、柚木の肩を、優しく両手で包み込んだ。

「充、死んぢまったよおう……」

「うん」

それだけ言うと、チサは柚木の頭を黙って撫で続けた。

「うっ……」

こんなに、泣いたのはいつぶりだろう。喧嘩最強とまで言われた自分が、齢十八にもなって、少女に縋り付き嗚咽する姿はおかしいのだろうか。今まで受け入れようとしなかった分、その反動は、自分の想像を遥かに超えた悲しみを突き付ける。

柚木は、頭をチサに撫でられ、ただ、ただ子供の様に泣くことしか出来なかった。

チサと別れて家路を辿る。

雲の無い夜空は、星が満天に輝き、三日月が涙に濡れた目を照らす。皮膚にも、悲しみに濡れ、上を見上げたその時、この街の空がこんなにも美しかったことに気付かされる。

それと同時に、この美しい夜空を、もう見ることもさえ出来ない充のことを思うと、また、途方のない悲しみに襲われる。

……チサにはああ言ったが、俺はやはり寺田を許す事が出来ない。俺から、チサから充を奪った奴が許せない。

「なあ、太成。お前、チサのことどう思う？」

「どつって？」

「好きとか、嫌いとか」
「充、お前まさか、チサのこと好きなんか？」
「ああ。もう、ずっと」
「へえ、お前がねえ」
「んだよ。ニヤけてんなよ。けど、チサはお前のこと好きだかな」
「は？ んなわけねえだろ」
「やっぱ、気付いてなかったか」
「だから、んなわけねえって。てか、いつ告るんだ？」
「告るつもりはない」
「はあ？ 分かんねえ。好きなら告ればいいだろ」
「俺はお前とチサ、三人といれればそれでいい。それに、チサと同じくらいお前も好きだしな」
「なんだそれ。キモ」
「お前の頭の方がキモい。今時、リーゼントはねえだろ」
「テメツ！ 男はリーゼントだろが。なんなら、アイパーにすつか？」
「ははっ。やっぱお前、おもしろえなあ。退屈しねえ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8602z/>

零

2012年1月2日00時46分発行